

国内経済情勢

概 観

2月の鉱工業生産、出荷は閏年の影響もあってともに増加し、官公需もしだいに活発化してきている。商品市況をみると、不況カルテルによる生産調整等、供給側の市場対策を主因としていることに変わりはないが、総じてしっかりした動きを示し、卸売物価は3月も引き続き小幅ながら上昇した。

以上のように、このところ景気指標の中には底堅い動きを示すものも散見されるが、企業の業況見通しや投資態度は依然慎重である。

金融面では、2月の貸出は金融機関の積極的姿勢からかなり増加し、貸出金利は低下幅を大きくしている。また、4月から国債をはじめとして各種長期金利の引下げが実施された。

2月の国際収支は貿易収支が黒字幅を拡大したうえ、対日証券投資が流入超に転じたことや、多額の輸出前受け金の流入が加わって総合収支では大幅黒字となった。外貨準備は3月中の増加が185百万ドルにとどまり、月末残高は16,663百万ドルとなった。

2月の出荷はかなりの増加

2月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、1月に続いて前月比+1.2%の増加となった(原計数の前年同月比+6.5%)。もっとも、これには閏年による稼働日数の増加もかなり影響しているもの

と思われる。財別には、前月やや目だった落込みを示した資本財輸送機械と生産財が増加したが、一般資本財や耐久消費財は反落した。

鉱工業出荷(季節調整済み、前月比、速報)は、1月微減のあと2月は、生産と同様の事情もあって+3.8%と大幅な増加を示し、原計数の前年同月比でも+10.4%となった。増加の中心は前月大幅減少をみた資本財輸送機械と耐久消費財である。

生産者製品在庫(季節調整済み、前月比)は、前月微増のあと2月(速報)は-1.6%とかなりの減少を示した。財別には生産財のみが増加を示したが、これは主として、このところ需要伸び悩みを示している石油製品等の増加によるものである。このため、2月の製品在庫率指数は104.9と前月(110.7)に比べ5.8%ポイントの大幅低下となった。

設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、前月比)は前月大幅増加の反動から、2月(速報)は-5.6%と再び減少した。機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み、前月比)も2月には電力の統落と製造業の反落から-10.8%と減少し、原計数の前年同月比でも-23.3%と前年水準をかなり下回っている。一方、民間産業からの建設工事受注額(季節調整済み)は、2月(速報)前月比+6.0%と非製造業を中心にやや持ち直し、このところ一服状態だった官公庁分も、年度末工事発注の本格化もあって+37.4%と大幅に増加した(建設工事受注額全体の前年同月比は+33.0%)。

労働および賃金関連指標の動きをみると、2月の一般求人倍率(季節調整済み)は、非製造業からの新規求人が増加したため1.01となった(前月0.96)。2月の常用雇用(全産業、季節調整済み、前月比)は、製造業が引き続き振わず、-0.4%と減少が続いており、名目賃金(全産業)も前年同月比+13.6%と依然低水準となっている。

2月の全国百貨店売上高(速報)は前年同月比+16.5%と前月(+15.4%)に比べて伸び率をやや高めたが、これには営業日数増が響いているものとみられる。

商品市況は底固め模様

3月の商品市況をみると、合成繊維、石油が軟弱地合いを続けたものの、鉄鋼がほぼ全品種にわたって一段高となり、また非鉄金属、セメント、板紙等も強含み商状を続けるなど、このところ底固め模様をみせている。これは官公需がしだいに活発化していることに加え、一部品目で先高見込みや春需期待から在庫補充買いの動きがみられるなど、需要側の動きも多少は響いているが、総じて不況カルテルによる生産調整など、供給側の要因によるところが大きい。

2月の卸売物価は、繊維、非鉄金属が海外市況高から続騰したことを主因に、前月比+0.2%と半年ぶりに上昇した。また3月にはいってからも、石油・同製品は続落したが、鉄鋼が上昇し化学品、紙・パルプ・同製品等も下げ止まりとなったため、引き続き上昇をみた模様である。

3月の消費者物価(東京、速報)は、野菜、くだもの等季節商品の値上がりや、電報料などの上昇から、総合で前月比+0.6%と続騰した(前年同月比+5.3%)。なお、季節商品を除く前月比では、+0.5%となった(前年同月比+6.1%)。

この結果、46年度平均では、総合で前年度比+6.0%と前2年度の上昇率を下回ったが、季節商品を除いてみると+6.6%と前年度を上回った。

金利の低下一段と進捗

3月の金融市場では、銀行券が月中955億円の発行超(前年同501億円)となり、一方財政資金は一般財政支払が年度末のために増高をみたものの、外為会計の支払超は比較的小幅にとどまったため、月中では2,127億円の払超と前年(同3,065億円)を下回った。4月の金融市場も一般財政の支払増など季節的要因による資金余剰が見込まれており、このためコール・レートは4月1日から各条件物とも一律0.25%低下した。

3月の銀行券月中平均発行高は前年同月比+15.3%とほぼ前月(+15.2%)並みの伸び率となった。一方預金通貨の2月月中平均残高は前年同月比+25.4%と伸び率は若干低下した。

2月の全国銀行貸出増加額は6,426億円、前年同月比+41.8%と再びかなりの増加を示し、貸出残高の前年比伸び率も+23.9%となった。また3月も積極的貸出姿勢を映じて引き続き増加を示した模様である。中小企業金融機関貸出も2月は前年同月比かなりの増加をみた。一方、企業の需資動向をみると、不動産、建設、商社など非製造業には根強いものがみられるが、製造業は総じて鈍化傾向を強めている。

2月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中0.067%と前月(0.050%)を上回る低下を示した。とくに都市銀行については月中0.088%の大幅低下となり、水準も6.962%と7%台を割り込んだ。

3月の公社債市況をみると、中小企業金融機関、一部事業法人に外人投資家の買いも加わって需要は強い一方、売り物は引き続き乏しく、つれ

て市中実勢利回りはさらに低下している。

こうした市場の動向から、事業債発行条件が改訂され、4月起債分から応募者利回りが引き下げられたほか、利付金融債の応募者利回り、貸付信託予想配当率なども引下げの決定をみた。また国債、政保債、地方債の発行条件も改訂され、あわせて政府関係金融機関の長期貸付基準利率の引下げ等一連の長期金利引下げが実施された。

株式市況は、3月にはいって一時小反落したものの、月央以降は再び物色人気が高まり、騰勢を続けた。

国際収支は引き続き大幅黒字

2月の国際収支は、貿易収支が黒字幅を拡大(627百万ドル、季節調整後761百万ドル)し、対日証券投資が流入超に転じたうえに、多額の輸出前受け金の流入がみられたため、総合収支で661百万ドルの大幅黒字を示した(なお、2月25日以降、輸出前受け金の受入れ規制が復活された)。

2月の輸出(通関ベース、前年同月比)は+24.0%(邦貨表示額では+6.1%)と引き続き高水準に推移しており、品目別にみると、船舶、食料品等

は前年水準を下回ったものの、自動車、オートバイ、弱電製品等は高い伸びをみせている。地域別では、ほぼ全域にわたり前年水準を上回っているが、とくにカナダ、EEC向けの伸びが高く、米国向けも3割近い増加を示した。3月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は、前月比+2.2%と増加したが、原計数の前年同月比では前年3月の急増が響いて+6.4%にとどまった。

2月の輸入(通関ベース)は、前年同月比+11.4%(邦貨表示額では-4.7%)の増加を示した。品目別にみると、原油のほか、繊維原料、肉類、一般消費財等が増加の中心となっており、鉄鋼原材料、木材等は依然低調である。2月の輸入承認額(季節調整済み)は-4.3%と前2ヵ月著伸のあと反動減となったが、前年同月比では昨年2月の低水準もあって+18.8%とかなり高い伸びを示している。

外貨準備は2月中521百万ドル増加したが、3月中は185百万ドルの増加にとどまり、月末残高は16,663百万ドルとなった。

(昭和47年4月7日)